

疑問表現について

——院政期から室町期まで——

清* 水 登

疑問表現の本質について阪倉篤義氏は次のように分析されている。⁽¹⁾

疑問表現には、その名のごとく、大きく分けて「疑い」の表現と、「問い」の表現とがある。「疑いの表現」というのは、ある一つの懸案について結論を出しかねて、内心であれかこれかと思ひ迷うというかたちの表現である。いわば自分に答えを求めているものである。これに対して「問いの表現」は、そういう内容を相手目当てに表明して、その解答を求めようとする表現である。したがって、後者は当然、「ことば」というかたち（あるいはこれに代る記号）をもって相手に向って表出されるけれども、前者は、話し手自身の内で、自らに向って語りかけるのであって、「独言」の形をとることもあるが、いわゆる、聴覚的な「ことば」のかたちで表明されるには至らないことが多い。それをあえて文字にした場合、たとえば和歌や日記文などにおいては、それが直接に読み手を目指すもの（問い）であるのか、ないしは独語的なもの（疑い）であるのかを、厳密には区別できない場合も多いことを承知しておかなくてはならない。さらにまた、このことと関連して考えられるものに、「反

語」というものがある。一つの懸案に対する正の解答を、話し手自身としてはすでに内心に用意しながら、表現的には、いちおうこれに反対する負の内容の問いかけを行うかたちをとり、当然返ってくるはずの、それに対する負の解答を予期することによって、反転して自らの解答の正当さを強調しようとするものである。その効果は、「問い」の場合に最も発揮されるのであるが、「疑い」の場合には、これが、いわゆる自問自答のかたちで行われることになる。

また、山口堯二氏は、右のような疑問表現がもつ本質をもとに次のような分類法を提案されている。⁽²⁾

典型的な疑問表現には「疑い」の表現と「問い」の表現とが一応区別できるが、いわゆる「問い」の表現においても、話し手みずからその内面の疑念の解消をめざして、何らかの解答案を提示しなければならなかった（第一章三）。典型的な疑問表現がみずから解答案を提示するという形で成立するからこそ、その解答案の性格をずらすことによって主体の情意の訴えに重点

*T380 長野市三輪八一四九七 長野県短期大学

をおく詠嘆性の表現や、みずからその案を否定して一つの判断を確言・主張する反語性の表現も可能なのである。また、疑念の解消は不問に付して、疑問文と共通の形式を平叙文などの文中の不確定成分に利用できるのも、典型的な疑問文自体がそこに解答案をふくむ、その判断性において、平叙文などとの共通性を本来的にそなえているからである。したがって、広義の疑問表現やその関連領域の全体に通用しうる方式を区別する視点は、他者に何を要求するかではなく、話手自身がどういう形で解答案、ないしは、その性格をずらせた案を提示するかにおかなくてはならない。

結論を先に示せば、私はそういう視点から、広義の疑問表現（および、それと形式の共通性を有する不確定成分）の方式を次のような二類三種として提えることにしたい。

(I) 不定方式…………… (1) 不定方式

(II) 特定方式…………… (2) 並列方式
(3) 単独方式

「不定方式」については、「話手がどうしてもはっきりした具体的な解答案を示せない場合に採らざるを得なくなるのが、疑問詞を用いる方式⁽³⁾」とされ、宮地裕氏の示された「説明要求の疑問」に該当すると、山口氏によってその概要が示されている。「特定方式」についても、「話手がある範囲まで具体的な解答案を提示できる場合は、特定の具体的な解答案を提示して疑念の解消をはかる方式⁽⁴⁾」とされ、本方式においては疑問助詞が重要な標識となるととされているのである。特定方式のなかでも、特定の解答案を二つ以上並列させる方式と、特定の解答案を一つだけ単独に提示する方式とが存し、それらを並列方式、単独方式とに区分されて

いるのである。山口氏によると、前者は阪倉篤義氏の示された「選択要求の疑問」に、後者は宮地裕氏の示された「判定要求の疑問」に該当するとしておられる。

以上のような山口氏によって提案された疑問表現における形式上の区分（「不定方式」・「特定方式」）にしたがい、院政期から室町期までの疑問表現のあり方について概観することにする。

一 今昔物語集における疑問表現

『今昔物語集』における疑問表現について山口氏によって提案された分類法（「不定方式」・「特定方式」）にしたがい、分析・整理した結果が次の表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲである。表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは『今昔物語集』における疑問表現がどのような場面において出現しているか、およびその区分として「会話」、「心話」、「地の文」の別に示してある。ただし、用例は『今昔物語集』の「本朝仏法部」（巻十―巻二十）と「本朝世俗部」（巻二十一―巻三十一）のみとし、和歌における疑問表現は除いてある。

表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの示す結果より判断されることは大略次のようなことである。

不定方式について

① 「不定方式——ゾ」の多くは会話部において認められる。

② 「不定方式——ヤ」、「不定方式——カ」はともに少なく、具体的な用例は次の通りである。

「我レ弓箭ノ道ニ足レリ。今ノ世ニハ討勝ヲ以テ君トス。何ヲ憚ラムヤ」ト云テ、
(二十五・一)

「其ノ尊ハ我レニ可挑キ事カハ。何事ニ付テモ手向ヘシテムヤ。穴糸惜」トナム云」ト良文ニ告グ。
(二十五・三)

男ノ云ク、「近クハ水不候ハズ。但シ、何ナル事ノ候カ」ト。

表 I 今昔物語集の疑問表現 (会話)

表現形式	不定方式														特定方式													
	。。	ゾ。	ヤ。	カ。	ラ。	ゾー。	ゾーゾ。	ゾーヤ。	ゾーカ。	ゾヤ。	カー。	カーゾ。	カーヤ。	カーハ(有ラム)。	ヤー。	豈ヤ。	ソ。	ニカ(有ラム)。	ゾーカー。	ヤ。	カ。	ニヤ(有ラム)。	ヤハ。	カハ。	ニカ(有ラム)。	ヤー。	カー。	
巻	11	1	26				1			7	1					1	1			2	1							
	12	7	18			3				14		1				1				3	5						5	
	13	4	27			1	1			3										5	2		1					
	14	6	19			3	4			18							1			6	5						7	
	15	3	21			7	1			7					1		4	1	10	8	1						2	
	16	14	46	1		5	2			21		1	1				3		14	8	3	1	1				2	
	17	11	15			2				2	10						1	1		19	4							
	19	10	48			2	1	1		19			1					1		16	7	2	2				11	
	20	10	40		1		5			11	1						1	2		15	2	1						7
	本	22	1	5			1				4						1			1	1							
23		4	12			1				4	1					2			3	3	1						5	
24		11	30			1	1			13	1	1	2				2		8	3	1	1					1	
25		8	7	2		1				7			1				1		10	3		1	4				4	
26		29	42						1	1	12						4	3		11	11	3	3		1	9	1	
27		22	27					1		12			2					2		9	9	3	1	1			2	
28		23	42			1				11								1		15	8			3			7	
29		17	32	1		1				13	1		2				1	4		12	5	2		2			7	
30		8	12			1				7			1				1	1		3	3	1	1					
31		8	17		1		2			1	8	2	1				2	2		5	1	3						2

表II 今昔物語集の疑問表現(心話)

表現形式	不定方式										特定方式						
	。。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。	ソ。
卷																	
11	3			1		1		1				1		1		1	
12		4	2			3			1	1		2		9		2	
13	1	2				1	1					2		3	4	1	
14	3	5						1				2		3	2		
15	2	3	1	1								2	2	3	3	3	
16	12	5	1			4		2				5		7	8	5	1
17	3	2				3							1	2	1	2	
19	8			1		5		4		2		13	1	5	9	8	1
20	11	2				1	2	1	1				5	1	3	1	2
22	3					1							3	1		1	3
23	2												6		2	2	5
24	1	2				6							8	3	4	2	4
25	1					2		1						1		8	2
26	13	7		1		1				1		8		5	6	7	
27	8	5				3								7	6	9	
28	11	5								2			8	5	1	4	7
29	10	7				3		1				13	1	1	1	9	4
30	5	1				4		1			1	2		1	4	5	3
31	14	11				3		1				7		2	1	7	3

表Ⅲ 今昔物語集の疑問表現（地の文）

表現形式	不定方式										特定方式					
	。。	ゾー。	ヤー。	カ。	カーヤ。	カハ。	ニヤ(有ラム)。	ゾヤ。	ニカ(有ラム)。	豈ヤ。	ヤ。	カ。	ニヤ(有ラム)。	ヤー。	ヤハ。	カハ。
卷																
11					3	1		1			1	1				
12	5				1	1			1		1	2	2			
13	4				4				1	1	1	3	1	1		
14	2								1		3	4	1			
15	1				1						1	3				
16	1				4						1	6	1	1		
17					1					2	2	4		1		
19	2		1	3		1			3	2		11	4	2		
20	1	1			3				1				6	2		
22					1							1	1		1	
23					1			2	4			2	1		1	
24						1						5	2			
25	1					1			1	1	1	3	1			
26	3				5	2	1		2			10		2		
27	1	1			2	1			3	2		14	1	2	1	
28	4				2	1			4	2		9	3			
29	2				3	3			6	1		8	2	2		
30					3							3	3			
31	4				1	2			1	3	1	15		2		

「何主ノ坐スルカ」ト云フ。 (十六・二十八)

③ 「不定方式——ヲ」が少数ながら次のように認められる。
 候ヒト候フ人、「此ハ何ナル事ヲ」ト云ヒ嗶ケルニ、 (二十九・十二)

(二十・四)

「アラ己ハ年来許此テ二人臥タリケルヲ。此テハ、何デ口淨
 クハ云ケルヲ」ナド、 (三十一・十)

「不定方式——ヤ」、「不定方式——カ」、「不定方式——ヲ」

はともに会話部に出現している点で注目される。

特定方式について

① 「特定方式——ヤ」は地の文、心話部にくらべ会話部により多く認められる。

② 「特定方式——カ」は心話部、会話部、地の文に共通して認められるが、地の文においては少数である。地の文においては「特定方式——ヤ」の出現率が会話部を上回っている。

③ 「特定方式——ニヤ(有ラム)」は会話部にくらべ心話部、地の文により多く出現している。

会話部に出現する「特定方式——ニヤ(有ラム・有ケム)」は次の通りである。

僧都ノ云ク、「此ク御シケレバニヤ、近来恋ク思エ給ヒツレ

バ、参ッル程ニ、道ニゾ使ハ値タリツル」ト。(十五・三十九)
 女ノ云ク、「知り奉ラセ可給キ人ノ御共人ニヤ」ト。

(十六・七)

「不知ヤ。実ニヤ有ラム、『明日ノ夕方、此ニ可来シ』トゾ聞ク。共ニ有ル者、此ニ留タル者ノ、取り加テ七八十人許ゾ有シ」ト云ヘバ、

(十六・七)

此ノ清水ニ詣ヅル女人ヲ呼テ云ク、「極テ貴ク日夜ニ参リ行キ給カナ。知タル人モ不御ニヤ」ト。

(十六・九)

聖人音ヲ高クシテ云ク、「僧賀ヲシモ召テカク令挾メ給フハ何ナル事ゾ。更ニ不心得待ズ。若シ乱リ穢キ物ノ大ナル事ヲ聞シ食タルニヤ。……」ト云フ音、

(十九・十八)

「参テ此四五日候ヘドモ、憚御前ニモ不罷出ネバ、後ノ壺屋ナドニ候ニヤ」ト弟子ノ云ケレバ、

(十九・二十三)

聖人居寄テ獵師ニ云ク、「近来極テ貴キ事ナム侍ル。我レ年来他ノ念無ク、法花経ヲ持テ奉テ有ル驗ニヤ有ラム、……」ト。

(二十・十三)

「……同ジ刀ノ仕ヒ様也。敵ノシタル事ニヤ。然レド盗人ト思様ニシタルナリ」ト云ヒ嗔テ、

(二十三・十五)

女法師ノ云ク、「己ハ誰トカ知侍ラム。此家主ハ筑紫ニ罷ニキ。其ヲ知り給ヘル人ニヤ有ケム。[]不知侍」ト。

(二十四・六)

「……京ニ上ル人ナドノ法師ニ取センナド思テ、取テ逃ニケルニヤ。穴悲シトモ悲シヤ」ト云ヒ次テ、

(二十六・五)

主ノ、「我ニハ何ノ詫カント為ルゾ。此許怖シ気ナル水ノ面浪ノ立タルヲ此ク云フハ、汝ガ浪ニ被漂倒ヌベクテ、否不見ニヤアラン。……」トテ、

(二十六・十二)

長ノ云ク、「佐渡ノ国ニハ、金ノ候フニヤ。……」ト。

(二十六・十五)

「……若シ人ナドノ火付ケムト思テ屋ノ上ニ登ラムト為ルニヤ。」「……」ト二人シテ忍ヤカニ云フ程ニ、(二十七・十八)

「此レハ若シ、死人ノ物ナドニ成テ光ルニヤ有ラム。亦死人ノ所ニ物ノ来ルニヤ有ラム。然ラバ此レ、構ヘテ見頭カサバヤ」ト云合セテ、

(二十七・三十五)

隣ノ人、「其レハ極テ怪キ事ニコソ有ナレ。若シ盜タルニヤ有ラム。……」ト云ケレバ、

(二十九・九)

「彼レヲ見ヨ。彼ニ、魚伺フニヤ有ラム。猿ノ居ルゾ。去来行テ見ム」ト云テ、

(二十九・三十五)

守女ニ、「然テモ京ニハ何也シ者ゾ。可然キニヤ、『哀レニ糸惜』ト思ヘバ云フゾ。不隠サデ云ヘ」ト云ケレバ、(三十・四)

此ノ翁ノ、札ヲ立テ、「我レ所得テ物見ム」トテ為タルニヤ有ラム」ナド、様々二人云繚ケルニ、

(三十一・六)

「陸奥ノ国ノ奥ニ有夷ノ地ニ差合タルニヤ有ラム」ト、彼ノ頼時ガ子ノ宗任法師トテ筑紫ニ有ル者ノ語ケルヲ聞次テ、

(三十一・十一)

「其ノ中有ノ旅ノ空ニハ、嵐ニ類フ紅葉、風ニ随フ尾花ナドノ本ニ松虫ナドノ音ナドハ不聞エヌニヤ」ト []ツ、息ノ下ニ云ケレバ、

(三十一・二十八)

「特定方式——ニカ(有ラム)」は次のように会話部に一例存するのみである。

「可申事有テ参タル也。兎ハ、其モ国府ニカ」ト問ヘバ、

(二十六・五)

二 保元物語、平治物語における疑問表現

『保元物語』、『平治物語』における疑問表現について山口氏に

よって提案された分類法（「不定方式」、「特定方式」）にしたがい、分析・整理した結果が表IVである。これについても疑問表現の出現する場面により「会話」、「心話」、「地の文」の別に示してある。表IVの示す結果より判断されることは大略次のようなことである。

不定方式について

① 「不定方式——ゾ」の多くは『今昔物語集』と同様、会話部において認められる。「不定方式——カー」についても同様な傾向を示している。

② 「不定方式」ならびに「特定方式」の両者に「——ヤラム」の形が認められ、「不定方式」に高い出現率を示す結果となっている。「不定方式——ヤラム」は『今昔物語集』にも一例存し、次の通りである。

女、「此ハ何カニ為ル事ヤラム」ト心モ不得ネドモ、待立テル程ニ、
（二十九・二十四）

特定方式について

① 「特定方式——カ」は圧倒的な高い出現率をもって会話部に認められることとなる。

『保元物語』、『平治物語』において会話部でない場面に出現する「特定方式——カ」の例は次の通りである。①が地の文、②、③、④、⑤が心話部におけるそれである。

① 人奢ては朝威を蔑如し、民武しては野心を挫む。能用意あるべきか。
（平治・上）

② そもそも京中にをかんとおもへども、落人かとしてうちやころさむずらん、
（保元・中）

③ 源氏の兵の追付奉るかと、肝魂をけさせおはします。
（平治・上）

表IV 保元物語・平治物語の疑問表現

資料名	表現形式	不定方式													特定方式								
		。ゾ。	。ヤ。	。カ。	。ソ。	。カー。	。カーゾ。	。カーヤ。	。カハ。	。ヤ。	。ゾーゾ。	。ゾーヤ。	。ゾヤ。	。ヤラム。	。豈ニヤ。	。ニヤ(有ラム)。	。ニカ(有ラム)。	。カ。	。ヤ。	。ヤハ。	。ヤ。	。カハ。	。ヤラム。
保元物語	会話	28	15			36	3	21			1	2	3	3			23	25	1	10	7	3	1
	心話	6				4		8	1			1	2			1	1	1	3	5			1
	地文	11		1		13		5	1			1			1		1		21	11			
平治物語	会話	53	45		2	6	48	1		1		1		1			5	28	1	19			1
	心話	6	1			4				1			2				2	3	1	8			1
	地文	3				2												1	4	12			

表V 天草版平家物語の疑問表現

表現形式	不定方式										特定方式										
	カ。	ゾ。	カ。	ソ。	カー。	カーゾ。	ゾー。	ゾーヤ。	ゾーゾ。	ゾーゾカ。	ゾーゾヤ。	ゾヤ。	カ。	ヤ(有ラム)。	ニヤ(有ラム)。	ヤー。	ヤーカ。	カー。	ニカ(有ラム)。	モノカ。	ヤラ。
	48	229	37	7	33	20	1	1	1	1	1	1	238	5	1	22	1	4	2	5	1

④ 日來のよしみを思ひ、経をもよみ、念仏をも申とぶらはんする者かとみるところに、
(平治・中)

⑤ 「……少もおとなしければ、今若殿はきるか、乙若殿をばさしころすか、無下にをさなければ、牛若殿をば水にゐるか、土にうづむか、その時われいかにせむ。」と夜もすがらなき悲みけり。
(平治・下)

三 天草版平家物語における疑問表現

『天草版平家物語』における疑問表現について山口氏によって提案された分類法(「不定方式」・「特定方式」)にしたがい、分析・整理した結果が表Vである。

表Vの示す結果より判断されることは大略次の通りである。

- ① 「不定方式」内部においては圧倒的に「不定方式ゾ」の出現率が高い。
- ② 「不定方式カー」の出現が目立って多くなる。『今昔物語集』に前掲の二例、『平治物語』に次のように一例存するのみである。
「御邊はたれか。」ととへば、
(中)

③ 「不定方式カーゾ」は、『天草版平家物語』においては次のように全例(二十例)ともに反語の意を担当する表現形式となっている。

いかでかさやうの儀はござらうぞ。
今はさのみつれなう何ごとをか待たうぞと言うて、
今度討たれさせられた人々の北の方いづれかおるそかなことがござらうぞ。
いかでか君を捨てまらせられて、多くの一門をば滅ぼさうとはおぼしめすと、
『平治物語』には、「不定形式——カーゾ」の表現形式をもって「問い」としての表現となっているものが一例認められる。

「何か源氏の大将軍ぞ。かう申は太宰大貳清盛げんさむ。」とぞのたまひける。
(中)

『天草版平家物語』において「不定方式——カーゾ」が反語を示す専用の形式として慣用されていたものと推測される。

① 『天草版平家物語』において「特定方式——ヤ(有ラム)——」は「一カクヤ」のように慣用的な表現として存していたものと思われる。

漢の四皓のがれた商山、晋の七賢がこもった竹林の住まいもかくやとおぼえてあはれな。
仙家から帰って七世の孫にあうたもかくやとおぼえてあはれにござった
八万の諸天に囲繞せられうもかくやとこそおぼえてござったが、
たがひに意趣を争ふ修羅の闘戦もかくやとこそおぼえたが、
餓鬼道の衆生もかくやとおぼえた。

鎌倉期における文末の「や」について阪倉厚義氏の次のような指摘がある。⁽¹⁾

こうなると「問い」の表現は、文末の「や」が担わざるをえないことになる。たしかに、鎌倉時代にも、「問い」としての「——や」の形式が、たとえば、

御湯をめさげやと思食すはいかに。叶はじや、と仰有ければ

……(延慶本平家・二本)

(お湯をつかいたいとお思のだが、どうだ、できないだろうか、とおっしゃったので……)

汝しれりや、忘れりや。ある聖をもつていはせし事は。(寛一本平家・三・大塔建立)

(お前は覚えているか、忘れたか。ある聖に言わせたことを。大明神の託宣のことは)

のように用いられてはいる。(後者は、選択的疑問とも見られる)。しかし、文末の「や」の使われ方は、多くは、人間の不在を問う場合とか、「や否や」という形とか、あるいは、

思ひきや。……にあらずや。……は夢なれや。……すべしや。尋ねて参らせなんや。

といった反語とか、婉曲な表現とかの場合であって、率直な「問い」は少なかつた。すなわち文末の「や」にもまた、文中のそれと共に、本来の、他に向っての「問いかけ」の語気はすでに薄れて、むしろ内に籠る表現の色彩を濃くするようになっていたのである。

このような鎌倉期における文末の「や」の衰退が室町期において促進され、『天草版平家物語』においては「特定方式ーヤ」は認められない。

また、そのことを示すものとして、次のような「不定方式——

ゾーヤ」の例が認められ、反語を示す表現形式として慣用されていたものと思われる。

なんぞ本をつとめずして末をとらんや。

(『天草版平家物語』・読誦の人に対して書す)

② 『天草版平家物語』には「特定方式ーモノカ」が、『今昔物語集』、『保元物語』、『平治物語』には認められない新型の表現形式として存していたのである。

③ さうなう推参することがあるものか。

④ 一度せんないものと思はれまらして、ふたたび面を向けずるものかと言うて、

⑤ 鬢鬢の黒いはただしあらぬものか。

⑥ これほど心がかひなうては、仏道があるものか、ならぬものかと心に心を恥しめて、

右の諸例(「特定方式ーモノカ」のうち、⑦、①、②)の「仏道があるものか」は反語の意を担い、③、④、⑤の「ならぬものか」は「疑い」の表現を担っていることとなるが、⑦、①、②の反語的表現の場合も自問自答のかたちで行われた疑問表現とみることができるところから全例「疑い」の表現を担っているものと判断される。

『天草版平家物語』における疑問表現は、その出現率の面から大略「不定方式」に関しては文末の「ぞ」により、「特定方式」については文末の「か」によっていると判断される。

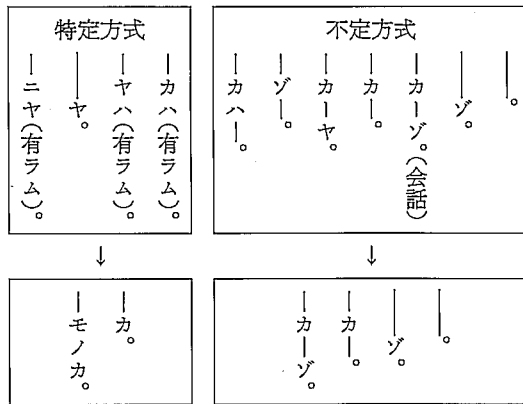
四 反語表現について

『今昔物語集』、『保元物語』、『平治物語』、『天草版平家物語』における反語表現について分析・整理した結果が表VIである。

表現形式からすると、『今昔物語集』、『保元物語』、『平治物語』

表VI 今昔物語集・保元物語・平治物語・天草版平家物語の反語表現

資料名	表現形式	不定方式													特定方式						
		。。	ゾ。	ヤ。	カ。	ラ。	カー。	カーゾ。	カーヤ。	カーハ。	ゾ。	ゾゾ。	ゾーヤ。	ゾーカー。	豈ニヤ。	ニカ(有ラム)。	ヤ。	カ。	ニヤ(有ラム)。	ヤハ(有ラム)。	カハ(有ラム)。
今昔物語集	会話	12	13	1		1	114	5	3	7	11	1	1	1	3	26	2		7	16	11
	心話	6	1		1		19			12	2		1			2	6			4	2
	地文	5			1		12		1	8					1	18				12	10
保元物語	会話	6	1				28		2	21			1		3	9	1		5	7	3
	心話						2			5											
	地文	1					7			2								2			
平治物語	会話	10	3		1		34									2	1		5		1
	心話						3														
	地文						2												1		
天草版平家物語		7	47	1	3		17	20				1				8		2			3



においては「不定方式——カ——」が多数を占め、「天草版平家物語」においては「不定方式——ゾ」が多数を占めており、院政期、鎌倉期と室町期との間において表現形式の上で差異が認められる。それに、「特定方式」においても、「今昔物語集」、「保元物語」、「平治物語」においては「特定方式——ヤハ・カハ(有ラム)」、「特定方式——ヤ」が主要な表現形式であるのに対して、「天草版平家物語」においては「特定方式——カ」、「特定方式——モノカ」がそれに代わる表現形式と認められる。

主要な表現形式を史的流れに即し図示すると次のようになる。

表現形式の面からいえることは反語表現としての標識(疑問助詞)の位置が文中より文末に移行している点が目される。

また、「天草版平家物語」において「不定方式——カ——ゾ」、

「特定方式——モノカ」が反語的慣用表現となっていることも注目されるのである。

「不定方式」には疑問助詞「か」と「や」とが同時に用いられる例が反語の表現を中心に認められるのであるが、室町期の『天草版平家物語』においてはその存在を確認することはできない。「不定方式——カーヤ」は次のようにある。

- ① 木ハ此レ心無シ。何カ音ヲ出サムヤ。 (今昔十二・十一)
- ② 聖人答テ云ク、「年来ノ貧道ノ身ニ、今栄花ヲ開キ、官爵ニ預ル、何カ不喜ザラムヤ」ト。 (今昔十二・四十)
- ③ 「……亦、数ノ公物私物其員有リ。何カ比ニ留ランヤ。但シ、何ニシテカ彼ノ難ラバ可遁」ト。 (今昔二十四・十四)

- ④ 「……命ヲダニ存ナバ、何デカ其ノ恩ヲ忘レ申サムヤ」ト云ヘバ、 (今昔三十一・十三)
- ⑤ 「……いかでかぜひをわきまへんや。宣事のよしをしめし給へ。」と申させ給へば、 (保元・上)
- ⑥ 「いかにしてか御寿命をのびさせましますべきや。」と声くへに申されければ、 (保元・上)
- ⑦ 「……さすがに義朝ほどの敵をばかうは誰か射んや。こゝにて八龍にうらか、せむ事はよもかなはじ。」と打笑は、 (保元・中)

⑥のみ反語的内容となっていない。

- また、「不定方式——ゾ——ヤ」についても次のようであって、
- ⑦ 夫人ノ云、「我が胎ハ垢穢也。何ゾ宿リ給ハムヤ」ト。 (今昔十一・一)
- ① 心ニ思フ様、「我ハ智深キ老僧也。行基ハ智浅キ小僧也。公何ゾ我ヲ棄テ彼ヲ賞シ給ハムヤ」ト、 (今昔十一・二)

⑦ 兄、「何ニゾ、聞給ツヤ」と問ケレバ、 (今昔二十七・三十四)

⑤ 「……なんぞ項羽が奴とならんや。」といふ。 (保元・上)

⑦のみ反語的内容となっていない。「不定方式——ゾ——ヤ」の表現形式についても『天草版平家物語』において確認することはできない。

「不定方式——カーヤ」の衰退は疑問助詞「か」の文中用法から文法用法への移行に伴なう時代史的流れに即したことによるものであろう。

五 まとめ

院政期の『今昔物語集』、鎌倉期の『保元物語』、『平治物語』、室町期の『天草版平家物語』の疑問表現を概観し、次のように総括することができる。

① 『今昔物語集』、『保元物語』、『平治物語』を通じ、「不定方式」の場合、会話部には文末「ゾ」の表現形式が多く、このことは後代の『天草版平家物語』にみられるように「不定方式」を代表する表現形式へと発展していく過渡的な姿を反映したものであろう。

② 「特定方式」における疑問の表現形式においても「特定方式——カ」が会話部に多く出現し(とくに『保元物語』、『平治物語』において顕著である)、このことも後代の「特定方式」における代表的表現形式として発展していく過渡的な姿を反映したものであろう。

③ 反語表現においても疑問表現における①、②と同様な傾向を確認することができる。

また、『天草版平家物語』においては「不定方式——カ——ゾ」、「特定方式——モノカ」にみるごとく反語表現における専用形式の発達、その固定化が促進されたものと考えられる。

〔注〕

- (1) 『日本語表現の流れ』（平成五年・岩波書店）一四二頁。
- (2) 『日本語疑問表現通史』（平成二年・明治書院）二二頁。
- (3) 『日本語疑問表現通史』二二頁。
- (4) 『日本語疑問表現通史』二二頁。

(5) 『日本語表現の流れ』一九六頁。

資料の引用は次の文献による。

- 『今昔物語集』（『今昔物語集』(1)～(4)・日本古典文学全集・小学館）
- 『保元物語』『平治物語』（『保元物語 平治物語』・日本古典文学大系・岩波書店）
- 『天草版平家物語』（亀井高孝 阪田雪子翻字『ハビヤン抄キリシタ』
- 『天草版平家物語』・吉川弘文館）